

2024年4月7日（復活節第2主日、B年）

牧師メッセージ

「あなたがたに平和があるように」

（ヨハネによる福音書 20:19）

司祭ヨセフ太田信三

人間を暗闇に留め、平和から遠ざける力を持つものの一つに、「疑い」があります。疑いは、人間を暗闇に引き摺り込む強い力を持っています。トマスの疑いはそれを象徴するものです。人間から苦しみがなくなるのと同じように、人から疑いが消えることも、残念ながら無いでしょう。だからこそ、主イエスは疑うトマスのところにも現れてくださいました。トマスは主イエスの復活を疑いました。彼は、復活が事実だということの確証を求めました。そして、傷を見るまで信じないと言うのです。しかしこのトマスにも主イエスは現れます。そしてご自分の傷に触れるようにと声をかけました。ここに主イエスの愛の深さを感じずにはられません。「信じないものではなく、信じるものになりなさい」と言われたトマスは、傷に触れるまでもなく、「わたしの主、わたしの神よ」と言いました。つまり、トマスは主イエスを「神」として信仰告白したのです。これは、それまでどの弟子たちもこのような信仰告白をしたことはありませんでした。トマスは疑いました。しかし疑いの先に主イエスと出会い、その愛に触れ、主イエスへの深い信仰へと導かれたのです。人間から疑いが消えることではないのかもしれませんが、しかし、トマスのようにそれを主イエスに向けるなら、その疑いは晴らされる、ということです。なぜなら、主イエスが人間の疑いを超えてこちらに来てくださるからです。恐怖も痛みも疑いも、神から人間を遠ざける強い力を持っています。しかし、それらに留まってしまう人間のところに主イエスは来てくださるのです。そして恐れも、疑いもイエスにさらけ出し、叫ぶならば、そこから主イエスはわたしたちを連れ出してくださいます。なぜなら、主イエスは人間が暗闇にとどまることを望まず、「平和」を望まれるからです。

「見ないのに信じる人は、幸いである。」という言葉は、主イエスを直接目にすることができない今を生きるわたしたちに向かっても語られています。主イエスは弟子たちの真ん中に立たれたように、今、わたしたちの真ん中におられます。そして、わたしたちが後悔の中であろうと、痛みの中であろうと、疑いの中であろうと、「あなたがたに平和があるように」と、わたしたち一人ひとりを祝福し、わたしたち一人ひとりにも神の息吹を注ぎ、新しく生きる命をくださるのです。トマスがそうであったように、たとえ疑いに囚われても、ここにいてくださる主イエスとの交わりに生きるなら、主イエスはわたしたちを「平和」へと導いてくださいます。そうして、わたしたちが主イエスによって起こされ、歩みだしてこそ、「あなたがたに平和があるように」という神の願い、神の平和がこの世界に実現するのです。主イエスはここにおられます。今日、ここにいる一人でも多くの人が、このことを「見ないのに信じる」者とされますように。「あなたがたに平和があるように。」という神の願い、思いに与り、感謝して、この礼拝を心からの感謝と賛美をもっておささげして参りましょう。